

防災教育が育む力～兵庫県立舞子高等学校環境防災科の取り組み～

兵庫県立舞子高等学校環境防災科

柘田 順子（震災・学校支援チーム EARTH員）

1 はじめに

兵庫県立舞子高等学校は明石海峡を望む神戸市の丘陵地にあります。1995年の阪神・淡路大震災では本校を含む多くの学校が避難所となりました。そこでは生徒たちが自発的にボランティアを行ったといいます。震災後の兵庫県は、かけがえない命の大切さと、未曾有の被害の中でお互いを思いやり助け合って行動した経験から得られた教訓を学ぶ「あらたな防災教育」を進めていきました。その流れの中、2002年に全国で初めての「環境防災科」が本校に設置されました。

2 防災教育の4つの分野

阪神・淡路大震災では、倒壊した梁や柱の下敷きになった人の90%以上が地震発生から15分以内に亡くなったとされています。避難訓練中心の防災教育では守れない命があるのです。環境防災科では、3年間で27～31単位、12～14の専門科目を通して、以下の4分野を網羅的に学んでいきます。

①ハザード

人的・物的被害を引き起こす可能性がある自然現象（＝ハザード：地震、火山、津波、台風、高潮、大雨、氾濫、土砂災害、温暖化など）のメカニズムを学びます。ハザードの影響を受けやすい地形・地質・気候などを災害の自然的素因と捉え、どのような防災が必要かを考えます。

②災害対応

避難行動、救出・救助、避難所の設置・運営、支援物資の輸送と授受、がれき処理と再利用、災害ボランティア、災害心理と心のケアなど、被災

地とその周辺で行われる活動と、事前準備について学びます。緊急地震速報や気象情報の活用、ハザードマップの作成、避難に関する情報の理解と採るべき行動の判断、ライフライン復旧までの対応など、「救える命を救う」ために必要な知識と技能を身につけます。

③社会背景（社会の防災力）

耐震・不燃化・堤防強化などのハード対策、コミュニティづくり・防災教育・情報システム・要配慮者支援などのソフト対策に加え、被災者支援の法制度、暮らしの再生、事前復興、SDGsと国際支援など、脆弱性（災害の社会的素因）を減らしレジリエンスを高める取り組みについて学びます。

④語り継ぎ

災害の体験者・支援者から直接話を聞き、災害時にできたこと・できなかったこと、良かったこと・困ったこと、復興の妨げになったことなどを過去の経験から学び、次の災害への備えや支援につなげます。体験者がいない（＝時間的・地理的に遠い）災害については地図（地形・地名）・文献・映像等の資料から防災の知恵を読み取ります。理解し考えたことを文章にまとめる他、教材を作成し生徒が先生役を務める出前授業を実施します。

環境防災科の専門科目は「災害は自然環境と社会環境のせめぎあいの中で発生する」という考え

環境防災科専門科目

年次	履修する専門科目
1年	災害と人間 環境と科学 自然環境と防災Ⅰ 防災情報Ⅰ
2年	環境と科学 自然環境と防災Ⅱ 環境防災講読 社会環境と防災Ⅰ Active 防災Ⅰ
3年	社会環境と防災Ⅱ Active 防災Ⅱ 卒業研究人と社会 防災情報Ⅱ

のもとに構成されています。自然が持つ防災力を人間の開発が損なう事例もあれば、自然と折り合い災害文化ともいべき暮らしが営まれている地域も存在することを、生徒は理解していきます。

3 防災教育の目的と方法

防災学習アドバイザー・コラボレーターの諏訪清二先生（環境防災科初代科長）は、防災教育の目的として① survivorとなる ② supporterとなる ③市民力を育む の3つを挙げています。被災地および被災地外（未災地）では、自分の命を守った後は助ける側にまわります。過去の経験が通用せず先の見えない状況に陥ることもあります。そこで必要になるのが「日常の力の転用」です。災害救援のエキスパートだけでなく、市民が得意なこと・好きなことを活かして支援活動に取り組む姿は、どんな災害時にも見られます。

上記の3つの目的に沿って、環境防災科では授業形態や評価に様々な工夫を取り入れています。例えば、特別非常勤講師制度を活用して外部の専門家を招き、過去の事例や最新の知見を直接学ぶことで、生徒と共に教員もスキルアップしていきます。これを支えるのが地域および全国にまたがるネットワークです。大学、NPO・NGO、企業、官公庁、JICA、語り部など、過去の災害を語り継ぎこれからの防災を共に担う人材を育てるため、協力を申し出て下さる個人・組織は多く存在します。また「ぼうさい甲子園」や「防災教育チャレンジプラン」、被災地支援活動などを通してつながった全国の学校との交流が、絶え間ない刺激と新しいアイデアを与えてくれます。

六甲山でのフィールドワーク、復興土地区画整理事業地区のまち歩き、近隣の小学生と共に作る安全マップ（ハザードマップではなく、まちの良さも含むのでこう呼んでいます）の作成など、校外学習も盛んですが、その下地となるのはグループワークやディスカッションなど“学び合い・高め合い”の要素を多く取り入れた授業です。

「夢と防災」という授業をご紹介します。一人一人が夢（職業）にまつわる過去の事例や最



六甲山でのフィールドワーク

新の対策を研究し、将来自分がどのような立場で防災に関わっていくかを考えてレポートにまとめ、発表します。消防士や災害支援ナースなど防災と直結する職業を挙げる生徒もいますが、「市役所職員としてまちづくりに取り組みたい」「放射線技師としての知識を活かして被ばく事故を防ぎたい」「保育士になり幼児に防災を教えたい」など、様々な視点で防災が語られます。生徒は「我がこと」として防災に取り組む意志を明確にすると同時に、発表の相互評価を通して、多様な価値観を理解し互いに支え合うことの大切さに気づいていきます。

4 おわりに——防災教育が育む力

「我がこと意識」は、主体性をもって社会的責任を担う姿勢につながります。コロナ禍による休校明けに行った「復興にとってたいせつなこと」という授業では、多くの生徒が「地域住民の一人としてつながりや連携を大切にし、自分ができることに取り組みたい」と答えました。我がこと意識（関心・意欲）が芽生えれば、生徒は自ずと次のステップ（思考・判断・表現／知識・技能の習得）に踏み出します。防災教育が育むのは、自らあるいは社会が直面する課題を丁寧に見つめ、周囲と手を携えつつ、解決へと導いていく力です。

<参考資料・文献>

- ・林春男（2004）『いのちを守る地震防災学』岩波書店
- ・諏訪清二（2011）『高校生、災害と向き合う 舞子高等学校環境防災科の10年』岩波ジュニア新書
- ・諏訪清二（2015）『防災教育の不思議な力 子ども・学校・地域を変える』岩波書店